

第四話

社会人になって
初任給は3万円

…のはずが

ん??

6千円しか
ないけど…?

もしかして
分割払い…?

今月は
もっと
減ってる…?
3千円??

その製作会社の
内情は火の車で

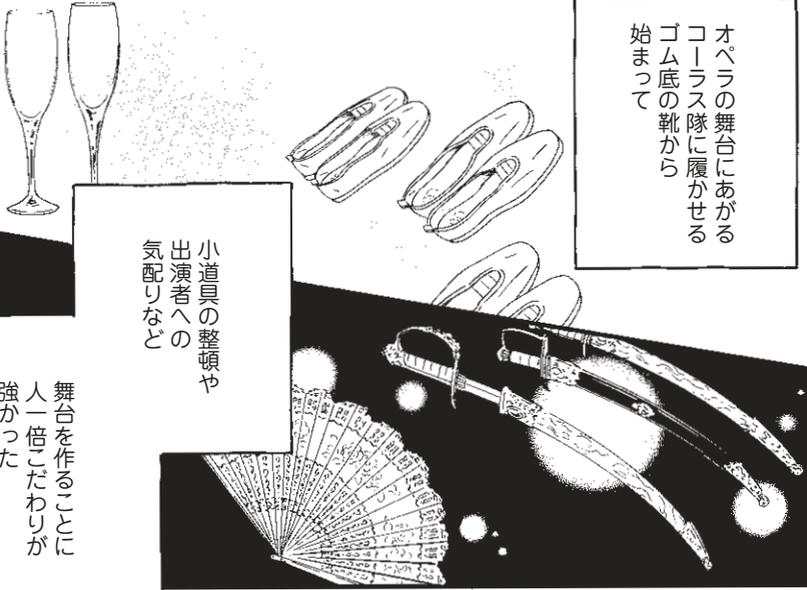
忠次が就職してから
1年もしないうちに
倒産した

※次の月

第四話

よし！
フリーの
舞台監督として
再スタートだ！！





オペラの舞台にあがる
コーラス隊に履かせる
ゴム底の靴から
始まって

小道具の整頓や
出演者への
気配りなど

舞台を作ることに
人一倍こだわりが
強かった



いくら遠目に
わからないって
いったって

貴婦人がつける
ネックレスが
ボール紙でできてる
なんて！



あああ
~~~~~!!

これが  
許せない!!



「椿姫」の  
公演準備中の  
ある日

クリスタルの  
シャンデリア  
なんかあると  
いいよな

じゃあベニヤ板を  
いつもより  
大きくして……

……また  
張りぼて!?

高級娼婦の部屋は  
豪華でないとな

ヴィオレッタの  
ネックレスは  
本物なのに  
シャンデリアが  
ベニヤなんて!!



そうは言うけど  
本物は安くても  
1基6万円だよ

公務員の初任給が  
1万2千円なのに  
ムリと言うしか…



1基6万円…

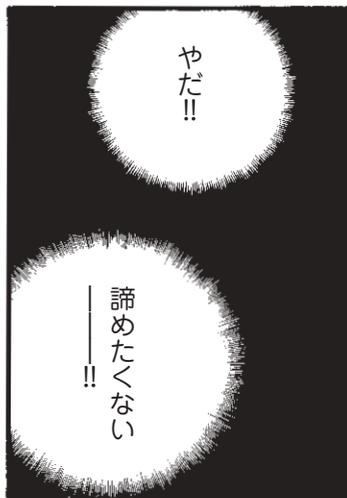
諦めるほか  
ないよ



本物の…

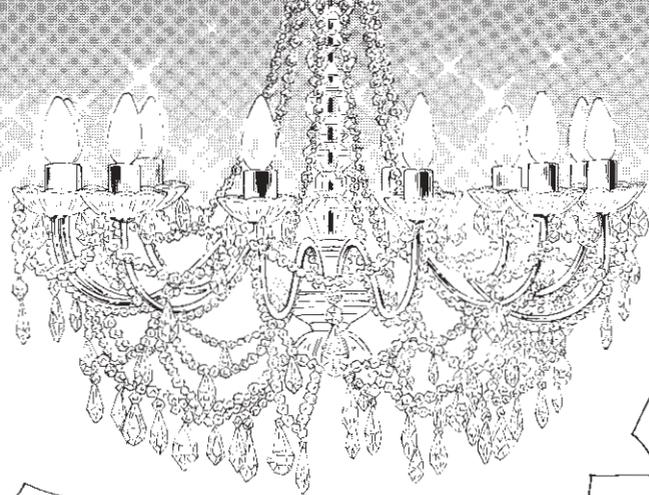


シャンテリア



やだ!!

諦めたくない  
!!



……ッ

これ!!

まさしくこれが  
ヴィオレッタの  
サロンに輝く  
シャンデリアの  
イメージだ!!



すみません!!

こちらの  
シャンデリアの  
製造元を教えてください!!



忠次は  
直接メーカに  
交渉に行った

……  
また  
きみか

社長

日本のオペラ界の  
貧しい状況を  
もっと知って  
いただきたくて……

ハハハ……  
その話はもう  
何度も  
聞いてるよ

きみの  
その熱意には  
負けたよ

特別に2基の  
シャンデリアを  
3カ月  
無料で貸そう

お忙しいところ  
申し訳  
ありません

ええ!!!  
ありがとう  
ございます!!!

おおお

!!

まふし!!

幕が開いた途端  
観客の反応が  
すごいな...

歌手の出る幕が  
ないとは  
このことだな...

ふふふ  
きれい...♡



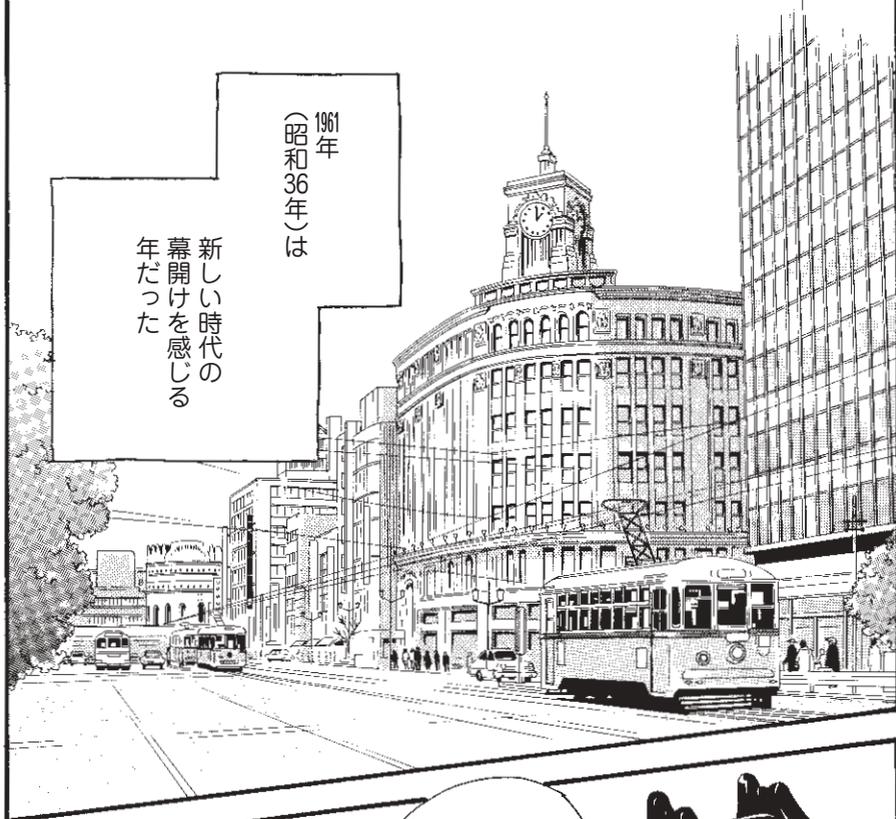
これをきっかけに  
忠次の舞台への  
こだわり

小道具への愛着は  
ますます  
高じていった



1961年  
(昭和36年)は

新しい時代の  
幕開けを感じる  
年だった

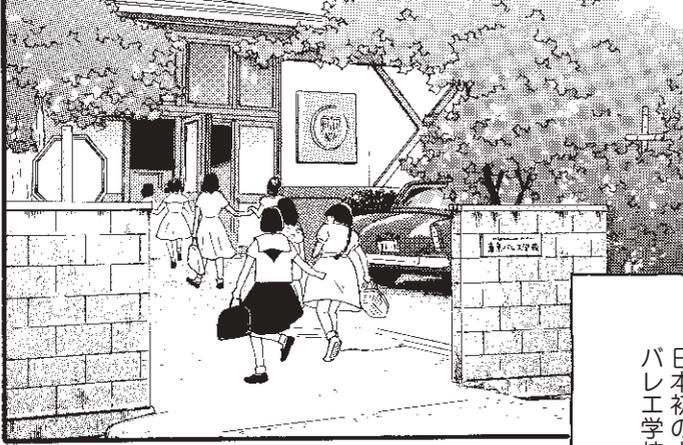


え？  
バレエ学校の  
発表会の  
舞台監督  
ですか



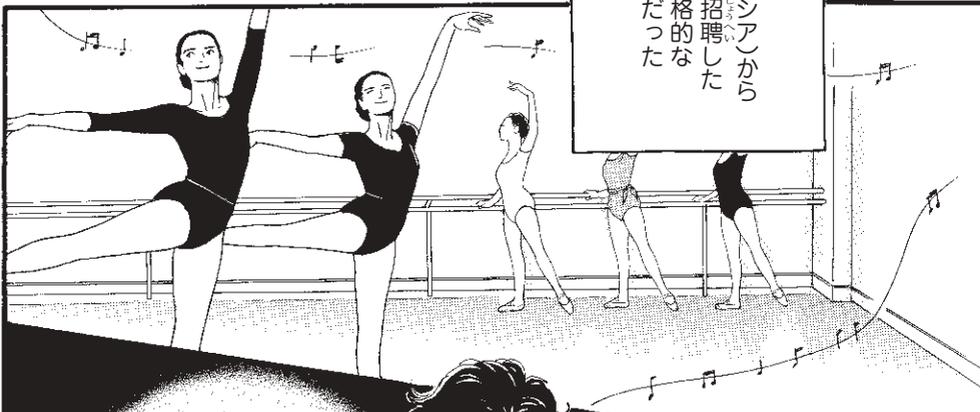
わかりました  
一度舞台稽古を  
見に行きます





依頼主は 前年に  
開校したばかりの  
チャイコフスキー記念  
東京バレエ学校

ソ連(現・ロシア)から  
教師2人を招聘した  
日本初の本格的な  
バレエ学校だった



ずっと生ピアノの  
音に合わせて  
練習してるのか…

ここはこれまでの  
日本のバレエ学校とは  
わけが違うぞ  
!?



ボリシヨイ・バレエ団から  
迎えた教師たちは  
超一流で  
メッセレル女史は  
ソ連の功労芸術家

もうひとり  
は  
ボリシヨイ劇場の  
バレエマスタ―  
ワルラーモフ氏であつた

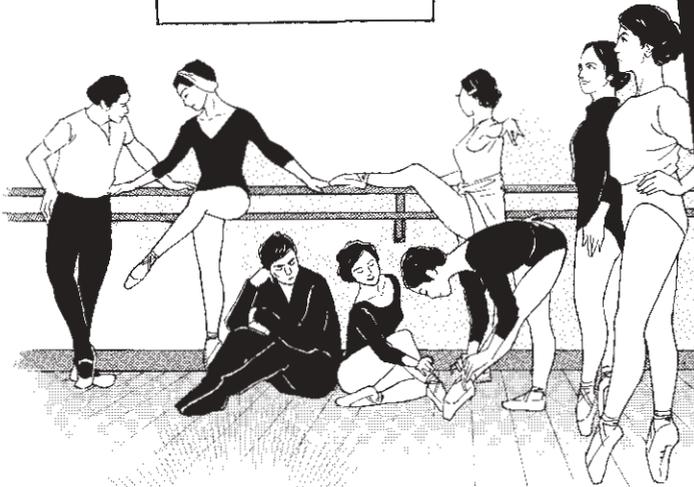


入学試験には  
日本中から  
プロも含めて  
400人もの  
応募があつた

教師も生徒も  
熱量が  
ハンパじゃない!!!

月謝は7千円と  
高額だったが  
トゥシューズや衣装は  
すべて支給され

バレエレッスンのほかに  
生徒たちは  
ピアノやロシア語  
英語の授業もあった



これが  
本物のか  
!!



よし……!

本物にふさわしい  
素晴らしい  
舞台にするぞ!



初公演は  
開校から1年3カ月後の  
1961年8月21日

会場は  
その年の4月に  
完成したばかりの  
東京文化会館だった



演目は  
オーケストラの  
生演奏がついた  
「くるみ割り人形」



ポリシヨイ・バレエ団から  
12人のゲストを迎えた  
破格の舞台だった

